

## 第8回

# 「近世地誌にみる多摩の地域像」

平成16年（2004）

地誌とは地域の地名や地形、集落・交通・産物・風俗・名所などを記録したものです。江戸時代の多摩郡を記したのものとしては、『新編武蔵風土記稿』『江戸名所図会』『武蔵名勝図会』などが著名です。第8回講座では、地誌の内容や編纂に関わった人々の事跡を通して、多摩の地域像を解き明かす講座となりました

- 第1講 7月4日(日) 江戸の文人が記した多摩の歴史と名所 74  
講師 鈴木 章生 (目白大学助教授)  
鈴木 章生「町歩きに必要なものとは」
- 第2講 8月1日(日) 名所図会のなかの古代・中世—多摩の基層文化を探る— 76  
講師 小野 一之 (府中市郷土の森博物館学芸員)
- 第3講 9月5日(木) 相沢五流・伴主の地誌編纂—関戸日記と調布玉川惣畫圖— 77  
講師 岩橋 清美 (川崎市公文書館)
- 第4講 10月3日(日) 創られた伝統—塩野適斎と『桑都日記』— 78  
講師 吉岡 孝 (国学院大学講師)
- 第5講 11月7日(日) 明治維新と近世地誌のゆくえ 80  
—「19世紀日本の地誌編纂史」という観点から—  
講師 白井 哲哉 (埼玉県立文書館学芸員)  
白井 哲哉「『明治維新と近世地誌のゆくえ』その後」

定員 70名

場所 多摩交流センター



「調布玉川」(『江戸名所図会』より)

平成16年7月4日 午後1時30分～3時30分

# 第1講 江戸の文人が記した多摩の歴史と名所

鈴木 章生 (目白大学助教授)

## 1 はじめに

### ①基本的事項

#### \*地誌

- ・地域の地名や地形、集落、交通、産物、風俗、名所などを記録したもの。
- ・地誌は江戸時代各地で作られる。
- ・挿絵を含む「図会」は1780年『都名所図会』以降ブーム

#### \*名所

古代 和歌の中に盛り込まれた地名＝ナドコロ (教養としての名所)  
武蔵野＝草 多摩川＝晒す  
嵐山＝紅葉 吉野＝桜  
中世 歌の世界を旅でたどる絵巻・紀行文 (訪ねてみたい名のある場所)  
道興准后『廻国雑記』 松尾芭蕉『奥の細道』  
近世 景勝地・歴史由緒・郷土・生活文化を意識(おらがマチの自慢の場所)  
『江戸名所記』『江戸名所図会』  
「名所江戸百景」「調布玉川絵図」  
近代 西洋風のものや伝統的なもの  
『開化東京土産』『東京名所独案内』『絵葉書』『写真』  
現代 消費と娯楽の大空間と巨大建造物 (都市の発展と娯楽の象徴)  
東京タワー 六本木ヒルズ お台場  
雑誌 メディア  
誰もが知っている有名な場所

→空間情報の共有化。共有化されたある場所の情報をどう表現するか

#### \*文人

詩文や書画など文雅なことをする人。

### ②本日のねらい

- \*江戸の文人が記した紀行文を読み、多摩での行動の軌跡を探る
- \*紀行文から多摩の名所・歴史を確認し、江戸の人の多摩に対する認識を探る。

## 2 村尾嘉陵の『江戸近郊道しるべ』

筆者 村尾正靖 号は嘉陵 宝暦10年(1760)～天保12年(1841) 御三卿(家重の子ども)のひとつ 清水家の広敷用人 浜町の賜舎に住む 後に三番町に移る  
資料 『江戸近郊道しるべ』自筆稿本26冊 国立国会図書館蔵 もともと原題はなし 『嘉陵紀行』『四方の道草』とも呼ぶ 『江戸叢書』『江戸近郊道しるべ』東洋文庫にあり

## 3 村尾嘉陵にとっての多摩

- ①日帰りもしくは一泊
- ②府中(六所明神)・小金井(花見)高幡不動(松蓮寺)
- ③自然・田舎との交流 癒し

## 町歩きに必要なものとは

鈴木 章生（目白大学准教授）

最近、町歩きが盛んだそうである。書店の一角には、町歩きに必要な情報雑誌やガイドブックなどが積まれ、中高年らの人気を集めているという。確かに、東京丸の内や六本木などの最新の名所を特集したガイドブックや流行雑誌の横で、江戸の風情が伝わる下町ガイドブック、ハンディータイプの都市図、復刻された古地図、鬼平犯科帖の世界、広重江戸百の世界、名所図会を歩く、散歩の達人、・・・などマニアックな印刷物が並んでいる。その多くが東京都心を対象に集中していることが近年の特徴のようだ。

少し前になるが、江戸開府四百年、東海道開設四百年と銘打ったイベントが東京をはじめ全国各地で行われた。これらのイベントは、東京はもとより地方都市の地域活性化に大いに盛り上がったというが、お祭り騒ぎのようなイベントが去った今はどうか。タレントの散歩番組のせいなのか、ちょっと近所の古刹や古い町並みを、ウォーキングシューズを履いて普段着のままぶらり出かけて行くような、そんな町歩きが今はブームのようである。

私は第8回の多摩の歴史講座において、御三卿の清水家に仕える村尾正靖（号は嘉陵）が記した『江戸近郊道しるべ』を題材に、嘉陵48歳から75歳までに歩いた日帰りの行動をいくつか紹介させていただいた。この資料、国立国会図書館に原本が所蔵されているが、活字本は平凡社の東洋文庫に掲載されており誰でも気軽に手に取ることができる。活字とはいえ、いささかとっつきにくい文章であるが、丁寧に読み込み、地図で彼の軌跡を追っていくと、嘉陵はここで何をみた、ここで何を感じたかを少なからず理解し、共感することができる。

府中や小金井、高幡不動や日野など多摩方面に足を運んだ嘉陵の記事からは、いろいろなことがうかがい知ることができた。それは、繁華な江戸を離れ、多摩の自然や武蔵野の景観を楽しみ、高台から眺める武甲、秩父の山稜を賛美し、あふれる自然や田舎にどっぷりつかっている嘉陵の姿であった。私は、多忙な公務の合間をぬって出かけるこうした嘉陵の行動を、癒しを求めた日帰りの小旅行と結論付け講座を終えた。

講座の受講者の方たちの中には、ガイドブックや地図を片手に出かける今の自分たちと嘉陵とをダブらせたに違いない。今の人たちは何を求めて町を歩くのか。町歩きによって遠く先人の思いに触れ、共感する機会があるならば、一過性ではない真の歴史発見の喜びを手にすることができるのではないだろうか。書店にあるガイドブック以上に、江戸時代の地誌や旅行記や随筆の類は、町歩きに欠かせない資料なのである。

平成16年8月1日 午後1時30分～3時30分

## 第2講 名所図会のなかの古代・中世

—多摩の基層文化を探る—

小野 一之（府中市郷土の森博物館学芸員）

はじめに—名所図会のなかの歴史場面

- \* 近世地誌、特にビジュアル版名所・伝説ガイドブックとして名所図会の登場。
- \* 同時代の景観・風俗を表現する挿画に、過去の再現映像（歴史場面）が加わる。『江戸名所図会』（1836年刊）は積極的に取り上げる。
- \* 『江戸名所図会』のなかの歴史場面「…の故事」、寺社縁起の引用、歌枕の紹介、編者や読者の興味のある、地元の伝説を詳しく紹介する立場、郷土史発掘の意義

### 1 古代幻想—ヤマトタケルの伝説

『江戸名所図会』冒頭にヤマトタケル伝説の挿画、本文冒頭は「武蔵」の項オトタチバナヒメ（弟橘媛）の伝説の挿画、本文「吾孀権現社」（墨田区）の項

### 2 歌枕の世界—都鄙の掛け橋

歌枕：歌に詠まれた諸国の名所。特定のイメージを伴いながら継承する。都からの視点で地方を捉える。

武蔵国の歌枕：隅田川・調布の玉川・堀兼の井・武蔵野・霞の関・向の岡・みよしのの里・立ち野・荒藪の崎

『江戸名所図会』は、江戸文化の基層に歌枕の世界があることを想定

### 3 中世の発見—よみがえる古戦場

分倍河原古戦場（府中市）：元弘3年（1333）新田義貞軍と鎌倉幕府北条軍の激戦地  
『江戸名所図会』編者の考証→『江戸名所図会』普及→『江戸名所図会』説の逆輸入→伝説の定着。『江戸名所図会』は「三千人塚」伝説成立のきっかけではないか。

『江戸名所図会』は、忘れられた地域の歴史を発掘し普及させるとともに、新たな伝説地の創作にも主体的に関わった。『江戸名所図会』編者の興味と地元の郷土史ブームの相乗効果をもたらしたものの、地域史再発見と新たな名所・旧跡の誕生・顕彰

おわりに—『江戸名所図会』の視線

- \* 歴史と伝説に裏付けられた平和都市＝江戸
- \* 郷土史発掘。社寺の縁起・由緒、名所旧跡の紹介→新たな伝説の形成
- \* "多摩の基層文化"は？
- \* 歌枕から復元する古代中世の景観＝国府・東山道・武蔵野・関・隅田川

（編集部注）この講座を元に小野一之「『江戸名所図会』のなかのヤマトタケル伝説」（『府中市郷土の森博物館紀要』第18号 2005年）がまとめられています。

平成16年9月5日 午後1時30分～3時30分

## 第3講 相沢五流・伴主の地誌編纂

— 関戸旧記と調布玉川惣畫圖 —

岩橋 清美 (川崎市公文書館)

### はじめに

- \* 18世紀後半から19世紀にかけての歴史意識の高揚
- \* 村の歴史を書くということ
- \* 広がる地域社会

### 1 相沢五流・伴主親子について

#### ① 関戸村と相沢家

- \* 関戸村  
現東京都多摩市。天正18年(1590)旗本山角氏(後北条氏の遺臣)領、正保年間には幕府領と旗本領の二給支配
- \* 相沢家について  
幕府領の名主。多くの林畑を所持し、安永期には杉や楓の売買を行う。

#### ② 相沢五流について

- \* 相沢五流(1746～1822) 通称 源左衛門。多摩郡在村の絵師では初めて法眼位を得た絵師。

#### ③ 相沢伴主について

- \* 相沢伴主(1768～1849) 五流の長男、通称源左衛門。江戸で袁中郎流の花道を学び、関戸村にもどって允中流を創始した。天保12年(1841)『允中挿花鑑』を刊行。  
・伴主の文化ネットワーク  
屋代弘賢・大田南畝・小山田与清・猿渡容盛・春登上人

### 2 「関戸旧記」の編纂—歴史の発見—

#### ① 内容構成

関戸の由来

#### ② 引用書目

歴史書・軍記物・地誌・古文書。斎藤月岑と交流 『江戸名所図会』の批判

#### ③ 横溝八郎と安保入道の墳墓

横溝八郎の墳墓  
関戸村延命寺前の古墳←江戸幕府は否定

自邸の屋敷墓を安保入道の墓と特定  
合戦史蹟の創出→中世の合戦場としての関戸郷の歴史を発見

#### ④ 「向岡」と「玉川ノ里」

- \* 「向岡」の解釈の差異  
古川辰(古松軒)『四神地名録』  
田沢義章『武蔵野地名考』  
大田南畝「向岡閑話」  
相沢伴主「関戸旧記」  
『新編武蔵風土記稿』
- \* 「玉川ノ里」の解釈  
石碑の乱立

### 3 『調布玉川惣畫圖』の作成—歴史意識の共有化—

調布玉川惣畫圖:弘化2年(1845)刊行、相沢伴主作成、長谷川雪堤浄書。卷子本、幅20 cm・長さ1335 cm

#### ① 作成経緯

多摩川の水源の特定。  
「伴主無尽」…門弟達の資金援助

#### ② 描かれた「関戸」

「関戸旧記」との比較、富士山の位置  
…歴史意識の視覚化・共有化



「調布玉川惣画図」の関戸部分（多摩市教育委員会蔵）

おわりに

- \* 「向岡」のその後  
万延元年（1860）蓮光寺村における桜の植樹  
新名所「向岡」の創出  
御猟場の設定  
聖蹟記念館の開館
- \* 18世紀後半から19世紀前半の変化

語る歴史から書く歴史へ  
考証学的手法の導入  
地域アイデンティティの創出

参考文献

大石学編『多摩と江戸—鷹場・新田・街道・上水—』たましん地域文化財団 2000年

平成16年10月3日 午後1時30分～3時30分

## 第4講 創られた伝統

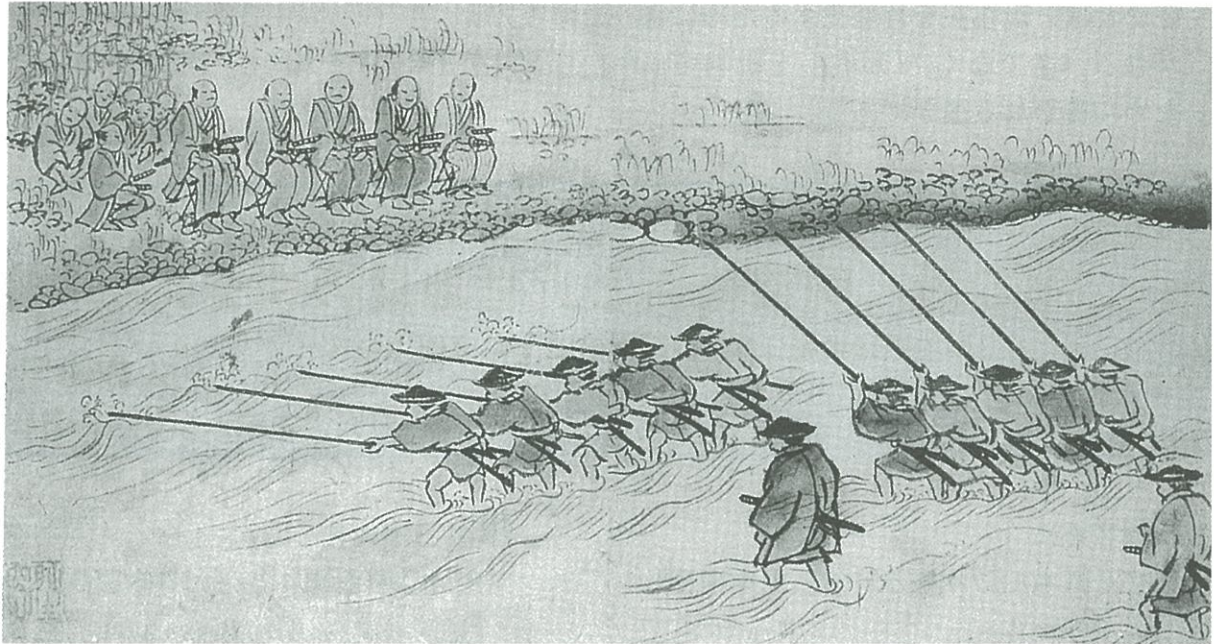
—塩野適齋と『桑都日記』—

吉岡 孝（国学院大学講師）

はじめに

- 現在の多摩地域のイメージ  
軍事的要衝、千人同心の設置  
→幕府への忠誠心の高揚  
→新選組の土壌  
この図式は正しいか？→否。主君と主従

関係のない住民が「忠誠心」を持つはずがない。  
千人同心は忠誠心を持っていたのか？  
千人同心は西方から侵攻してくる敵軍に対する防衛という軍事的理由から八王子に置かれた、という解釈は正しいのか？



「桑都日記」長槍水打の図  
 (八王子市郷土資料館編『ブックレット 千人のさむらいたち～八王子千人同心』より転載)

桑都日記から考察する。

## 1 千人同心の設置をめぐる

小仏峠の防御という軍事的理由は天正18年にはありえなかった。

→防御より攻撃用としての千人同心設置。副次的理由として代官陣屋が集中した政治的拠点・八王子の警備。

何故「千人同心は小仏峠の防衛のために設置された」という説が生じ、『徳川実記』に掲載されたのか？

『徳川実記』

徳川幕府の公式歴史書、文化6年(1809)編纂開始、天保14年完成。幕府の儒者・林述斎が編纂を建議。

## 2 塩野適齋と『桑都日記』

塩野適齋

安永4年(1775)、天正・慶長以来の千人同心組頭河西家に生まれる。通称・所左衛門、号・適齋。寛政3年(1791)、同じ天正・慶長以来の千人同心組頭塩野家の養子となる。学問では享和2年(1802)に幕府の儒者・林述斎に入門。

文政甲申の禍

千人頭の不正を訴える張訴を発端に、千人同心50人が処罰された事件。塩野適齋も組頭から平同心へ

新家の千人同心

千人同心を勤める権利が株として取得し、富裕な百姓達になった千人同心。

→適齋は「文政甲申の禍」は無軌道な「新家」の千人同心が起こしたものだと考えた。

→八王子の地誌を書くことでこの鬱憤を癒す…『桑都日記』の執筆動機

「小仏峠防衛」という今日でも通用している常識は、適齋が『桑都日記』で「新家」の千人同心を批判する対照的存在として「旧家」を強調する中で生み出されたフィクション—創られた伝統—

おわりに

千人同心は小仏峠防衛のために置かれた…甲州街道が発展した時代に生まれた誤解。塩野適齋と『桑都日記』によって定着

歴史とは「現在」を合理化するために書かれるべきでなく、「現在」を批判するために書かれるべきである。

参考文献

吉岡孝『八王子千人同心』同成社 2002年

平成16年11月7日 午後1時30分～3時30分

## 第5講 明治維新と近世地誌のゆくえ

—“19世紀日本の地誌編纂史”という観点から—

白井 哲哉（埼玉県立文書館学芸員）

### 1 はじめに

なぜ、日本でこれほど自治体史を編纂しているのか？

- ・東アジアの世界の中で
- ・近世の藩選地誌

### 2 江戸時代後期の地誌編纂—江戸幕府を中心に—

#### \* 寛政改革と地誌編纂

伊奈忠尊の失脚と関東郡代兼帯勘定の奉行の設置→関東支配の再構築と手段

#### \* 勘定所と昌平黉の地理調査

対外危機を契機とする日本地理への再認識→日本全土に及ぶ地図・街道・地名調査の実施

#### \* 昌平黉地誌調所の『新編武蔵国風土記稿』調査・編纂、八王子千人同心の登用

### 3 明治維新と地誌編纂事業

#### \* 幕末に至るまで続いた藩撰地誌の編纂

#### \* 明治維新直後における地理・歴史調査、国絵図の作成、『復古記』の編纂、全国の地誌編纂

#### \* 3つの地誌編纂

『日本地誌提要』『日本地誌略』

#### 『兵要日本地理小誌』

##### \* 『皇国地誌』と『大日本国誌』

- ・『皇国地誌』：明治8年～17年。11年以降事業縮小…明治17年の『新編武蔵国風土記稿』出版をめぐって
- ・『大日本国誌』：明治18年～24年、直轄の現地調査
- ・『補正日本地誌提要』：明治24年～26年、26年に中絶

### 4 多摩に残る「地誌編輯」関係資料

#### \* 調査に関する達類

- ・明治8年2月：地名呼称調査の達…北多摩郡の事例
- ・同年10月：皇国地誌調査の達…埼玉県秩父郡の事例

#### \* 地誌編輯取調書の提出催促

- ・明治13年2月…北多摩郡の事例
- …明治12年の達

#### \* 神奈川県職員の巡回調査

- ・明治12年3月…南多摩郡の事例
- ・明治13年6月…北多摩郡の事例

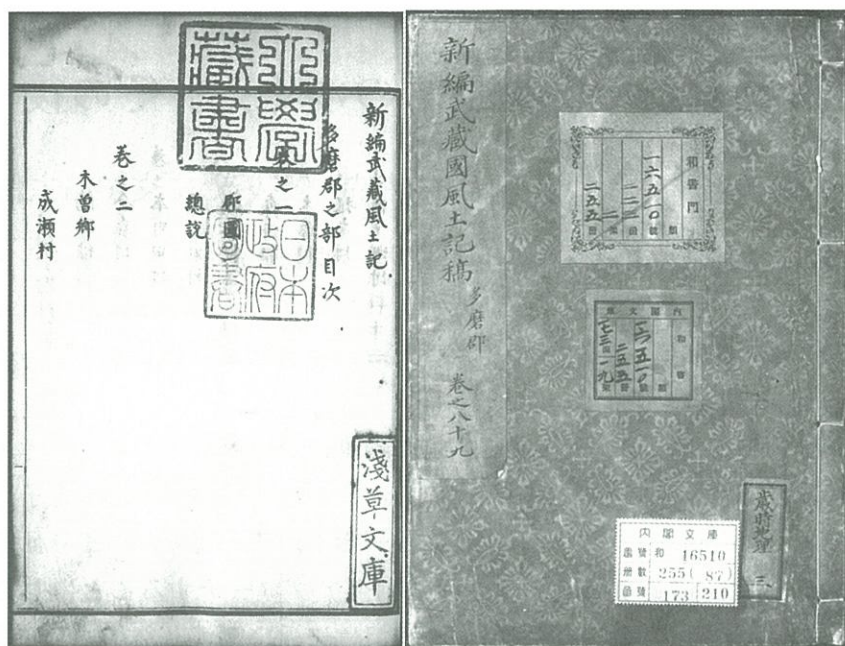
#### \* 地誌草稿の雛形

- ・明治13年8月…北多摩郡の事例

#### \* 『大日本国誌』調査について

- ・明治19年…南多摩郡の事例 「地誌





「新編武蔵国風土記稿」献上本（国立公文書館蔵）

編輯取調簿」

- ・明治20年6月…西多摩郡の事例  
cf.北多摩郡役所との交渉

- ・「国民国家の形成」という問題意識
- ・地域社会との関わり

- 5 おわりに—19世紀の地誌編纂として—
- \*『新編武蔵国風土記稿』から『大日本国誌』までの連続性を考える。
  - \*これからの研究課題

参考文献

白井哲哉『日本近世地誌編纂史研究』思文閣出版 2004年

## 「明治維新と近世地誌のゆくえ」その後

白井 哲哉（さいたま文学館主任学芸員）

今回、たましん地域文化財団から御連絡を頂き、標記の話をしてからもう3年も経つのかと気づいた。この年は多摩の近世地誌がテーマであり、当時私は拙著『日本近世地誌編纂史研究』（思文閣出版）を上梓して日が浅かったので、この依頼を断ってはいけなと覚悟した記憶がある。

話を受けた当初、私は八王子千人同心の地誌編纂について話をしようと考えた。ところが他の講師陣は皆多摩地域に詳しい旧知の方々で、特に吉岡孝氏は八王子千人同心の研究成果を公表された直後だった。そこで私は一歩下がる心境で、あまり研究の進んでいない明治政府の地誌編纂事業から多摩の事例へアプローチすることにした。少しずつ勉強を始めていたテーマだったが最後は一夜漬けに近い準備となり、当日受講された方々にはお聞き苦しい内容になったこととお詫び申し上げたい。

その翌年、八王子市郷土資料館で特別展「八王子千人同心の地域調査」が開催されるにあたり、関連講演会を行う機会が与えられた。私は、先に見送った、また拙著で十分展開できなかった八王子千人同心の地誌編纂事業とその意義を、この機会に見直してみようと考えた。講演会のタイトルは「八王子千人同心の地方史研究—『新編武蔵国風土記稿』を中心に—」と題し、新しい資料や知見を加えながら現段階のまとめをしたつもりである。その内容は『八王子の歴史と文化』19（平成18年8月）に掲載されているので、興味のある方は参照していただきたい。

明治政府の地誌編纂事業に関する勉強は、別の展開をすることになった。平成19年2月、早稲田大学とアジア民衆史研究会が「政治文化としての地誌調査」をテーマに国際シンポジウムの開催を企画し、なぜかその場で韓国の研究者と並んで19世紀日本の地誌編纂史を話す羽目になったのである。この時は「多摩の歴史講座」での勉強成果を生かし、前から気になっていた日本陸軍による中国・朝鮮の地誌調査を追加勉強して、何とか責任を果たした。この内容は未公表だが、いつかまとめたいと思っている。

翻って考えれば、私は修士論文の調査以来、近世地誌編纂の勉強を通じて何度も多摩のお世話になってきた。実はほかにも、個別の村落史研究や博物館・資料館の資料保存活動支援など、多摩地域との接点を持っている。いずれ何かの機会に、別の形でお役に立つことができれば幸いに思う。